

# Q<sup>3</sup>A<sup>3</sup>R<sup>3</sup>C Kyushu University Advanced Asian Archaeological Research Center NEWSLETTER No. 16 2018. July 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター ニュースレター



## 石ヶ原古墳の横穴式石室の移築復元

歴史情報研究部門  
人文科学研究院 辻田 淳一郎

下の写真は、かつて伊都キャンパスに存在していた、石ヶ原古墳（前方後円墳・全長49m・6世紀中葉に築造）の横穴式石室を移築復元したものです。2018年2月に、イーストゾーン東側正面のロータリーに設置されました。ここでは、この石室の移築復元の経緯について御紹介します。

伊都キャンパスでは全部で6基の前方後円墳の存在が確認されていますが、石ヶ原古墳は其中でも最後に造営されたものです。古墳はイーストゾーン講義棟2付近の標高74mの丘陵頂部に造られていましたが、キャンパスの造成に伴い削平されました。

1996年および2003～2005年に福岡市教育委員会によって発掘調査が行われ、須恵器などの遺物が出土しました。石室は盗掘され、石材が抜き取られており、ここに移築した石室の基底部のみが残存していました。本石室は、遺体を埋葬した玄室と、そこに入るための通路（羨道）から構成されます。羨道には石室入り口をふさぐための閉塞石が残されていました。調査終了後、墳丘自体は失われましたが、石室石材は、将来の移築復元に備えて、福岡市教育委員会の旧元岡事務所保存されていました。平成29（2017）年度に、イーストゾーンの竣工に合わせて移築復元する計画が進められ、全学の文化財ワーキンググループの岩永省三教授・田尻義了准教授と辻田の3名および施設部整備計画課が中心となって検討

を重ねました。またそれと並行して、イーストゾーンの石ヶ原古墳跡展望展示室の準備も進められています。

石室の移築に際しては、当時の調査の記録を元に、保存された石材の部位を同定することから始まり、石室内での石材の配置や高さなど、可能なかぎり石ヶ原古墳の石室の実物を再現する努力がなされました。

残存した石材から想定される玄室の規模は、奥壁幅2.1m、玄室側壁長3.6m、羨道部幅0.8m、羨道長2mで、全体の残存長（内法）は約5.6mです。石室の本来の高さは、類例との比較により、約2.5～3m前後と推定されます。発掘調査時には玄室床面の石材は抜き取られていましたが、ここでは類例との比較から床面に礫石が敷き詰められていたものと想定し、復元しています。石室壁体と床石には花崗岩と花崗閃緑岩、閉塞石には玄武岩が用いられています。

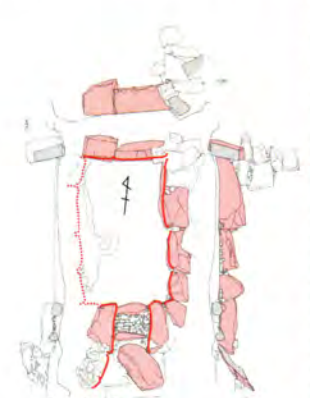
石ヶ原古墳の被葬者については、ウエストゾーン立体駐車場裏に保存された石ヶ原古墳群の被葬者層の上位に位置した、当時の糸島半島東部地域周辺の代表者といった性格が想定されます。石ヶ原古墳については、平成30（2018）年10月オープン予定のイースト1号館9階の石ヶ原古墳跡展望展示室にてキャンパス内の他の遺跡とあわせて詳細な展示紹介がありますので、ぜひそちらも御覧いただければと思います。



写真 石ヶ原古墳移築復元石室



石ヶ原古墳墳丘測量図



石ヶ原古墳石室実測図

※トーンは実際の石材を移築して復元しています。



## 北部九州地域における窯跡出土須恵器の胎土分析

精密分析部門  
アジア埋蔵文化財研究センター 足立 達朗

須恵器はその形態、製作技術などが、地域や時期によって変化することが知られており、それらの結果に基づき、在地の須恵器とは異なる須恵器の搬入が認識され、交易や地域間

交流などが議論されてきた。しかし、形態や製作技術などは「情報」であり、その情報があれば、異なる地域に特徴的な須恵器を在地で再現できる可能性があるため、厳密にはこれら

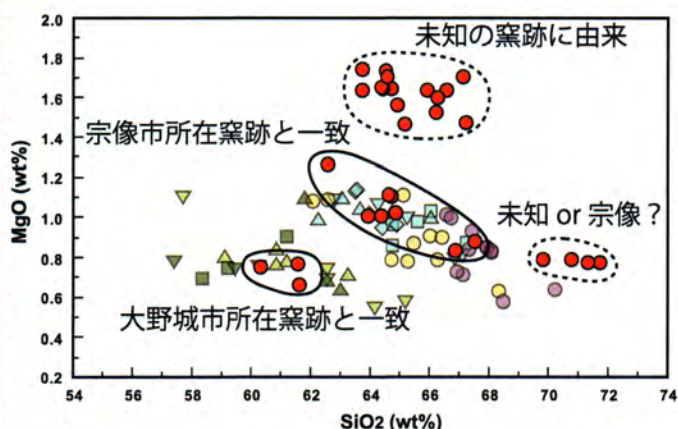
の差異だけを搬入の根拠とすることは難しい。これを検証するために、須恵器の化学組成に着目した分析が有効である(例えば三辻、2013)。須恵器の胎土は、天然の粘土や砂などの混合物であり、採取した地点の地質環境を反映するため、その土地特有の化学組成を示すと考えられる。これに基づけば、須恵器胎土の化学組成上の特徴から、その生産地を推定できることになると期待される。

センターでは、福岡県教育庁、九州歴史資料館、宗像市教育委員会、大野城市教育委員会、宇美町教育委員会、飯塚市教育委員会などの協力のもと、北部九州に所在する須恵器窯跡から出土した資料について地球科学的分析を実施している。窯跡出土資料は、出土した窯跡で生産され、窯跡近傍から得られた材料を使用したと想定される。これに基づき、資料胎土の化学組成について窯跡ごとの特徴を見出し、それらと周囲の地質環境との関係を考察することを目的としている。

分析は、波長分散型蛍光X線分析装置(XRF)およびレーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計(LA-ICP-MS)を用いた主要・微量元素、希土類元素を含む全岩化学組成分析である。分析対象資料は、福岡県内の大野城市の乙金地区窯跡群と牛頸窯跡群、宇美町の岩長浦遺跡、飯塚市の井出ヶ浦窯跡群、および須恵須賀浦遺跡を含む宗像市所在窯跡から出

土した須恵器資料である。これに加え、古賀市の船原古墳出土須恵器の分析を実施し、窯跡出土資料の胎土化学組成と比較することで、生産地の解明と流通の復元を考察した。

胎土の化学組成に基づくと、窯跡出土資料は、特に、 $\text{SiO}_2$ 、 $\text{MgO}$ 、 $\text{TiO}_2$ 、 $\text{K}_2\text{O}$ や $\text{Cr}$ 、 $\text{V}$ 、 $\text{Rb}$ などの元素において地域ごとにまとまりやトレンドを示すことが判明した(図左)。また、この区分に船原古墳出土須恵器計30点から得られた胎土化学組成を重ねると、大野城市所在窯跡の領域と宗像市所在窯跡の領域に重なる資料が認められたが、大半の資料は、高い $\text{MgO}$ 、 $\text{Cr}$ 、 $\text{Ni}$ 含有量を示し、既知の窯跡の領域には入らなかった。これらの元素は超苦鉄質岩に特徴的な元素であり、船原古墳の近傍に超苦鉄質岩の一種である蛇紋岩が分布していることを考慮すると、船原古墳近傍には未知の窯跡が存在し、船原古墳から出土した大半の須恵器は、その窯で生産された可能性が示唆される。また、これら船原古墳に特有の化学組成領域を持つ須恵器は、従来胎土の分類に用いられてきた $\text{Rb}/\text{Sr}$ 図(図右下)や $\text{K}_2\text{O}/\text{CaO}$ 図では、既知の窯跡の領域に重なり判別ができない。このように従来の須恵器胎土分析とは異なる多元素分析をすることで、地質学的データと組み合わせた解釈が可能となり、より詳細な原産地推定につながるということが分かりつつある。今後、窯跡出土資料の分析を継続し、最終的には須恵器胎土のデータベース構築を目指す。



大野城市・乙金地区	宗像市
■ 善一田 1次	□ 須恵須賀浦
▼ 薬師の森 5次	◇ 三郎丸堂ノ上C
▲ 雉子ヶ尾窯跡	▽ 朝町木山
大野城市・牛頸	△ 稲元黒巡
▼ 野添遺跡 7次	飯塚市
▲ 小田浦	● 井出ヶ浦
宇美町	古賀市
● 岩長浦	● 船原古墳

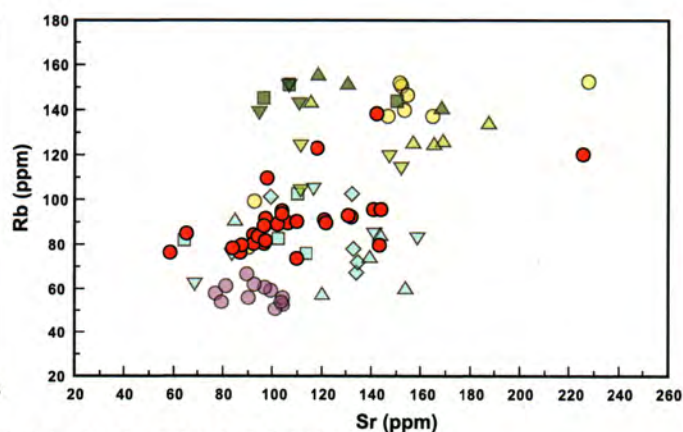
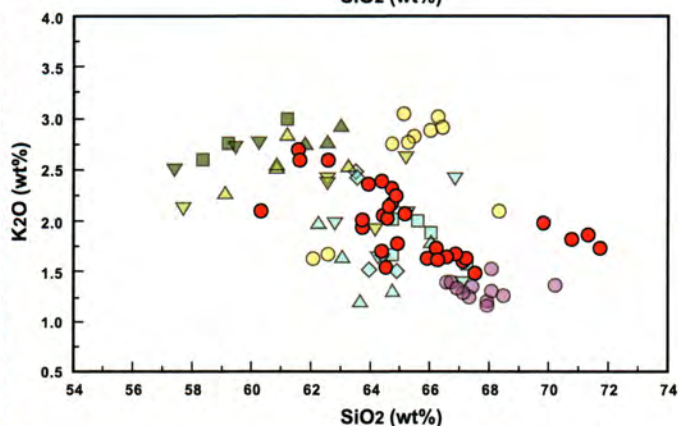


図 北部九州の須恵器窯跡および船原古墳出土資料の胎土化学組成

【センター活動報告】

2018年5月10日～12日 H30年度九州大学開学記念行事  
「統合学際的な考古学研究の最前線」としてパネル展示と  
分析機器の見学会開催実施

2018年4月より 九州大学基幹教育フロンティア科目  
「アジア埋蔵文化財学A・B」開講中!

九州大学アジア埋蔵文化財研究センター  
ニュースレター No. 16

発行: 〒819-0395 福岡市西区元岡744  
九州大学アジア埋蔵文化財研究センター  
編集: 仙田 量子 発行日: 2018年7月31日  
TEL: 092-802-5653/FAX: 092-802-5662  
E-mail: qa3rc@scs.kyushu-u.ac.jp  
ホームページ <http://scs.kyushu-u.ac.jp/qa3rc/>